

2022/7/3

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑮

『ヨハネの黙示録 4章後半 一天上界の様子 2』

黙示録 4章は、ヨハネが見た天の御座の様子が描かれています。

ヨハネは神の国の様子を見ましたが、神の国には、私たちが体験しているような時間の流れや空間の支配はありません。ですから、この地上にその様子を伝えるためには、象徴的な表現を使うしかありませんでした。神の国の情報を、私たちが知っている情報に置き換えて、象徴的な表現で表しているのです。例えるなら、テレビが3次元の情報を2次元で表しているようなものです。私たちは、平面しか映し出すことのできないテレビの情報から、3次元の世界を想像しているというわけです。

「御座からいならずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。」(黙示録 4:5)

「いならずまと声と雷鳴が起こった」とは自然界の様子です。これは、神は自然界をも包括していることを象徴しています。また、「七つの灯火」の「七」という数は、聖書では完全を象徴する言い回しで、真理を象徴しています。つまり、「神の七つの御霊」とは、真理は神の働きであるということの象徴です。

「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。」(黙示録 4:6 前半)

「水晶に似たガラスの海」とは、不純物が全くない透き通った世界を表現しています。神の御座は、まさに透き通った世界です。これは、神の本質を表し、「まったく愛」とも言われます。神のまったく愛はすべてを水晶のように透明にします。これは、赦しの恵みのことです。私たちは多くの不純物(罪)を背負って生きていますが、私たちが苦しめる過去を、神は水晶のように透明にしてしまうのです。こうして、すべてをなかったことにしてしまうのが、赦しの恵みです。

私たちは、この恵みによって神の前に立つことができます。どんな罪人であろうとも、神はその過去を消し去ってくださいます。

「御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。」（黙示録 4:6 後半～7）

神の国の様子は私たちが経験できる世界ではないため、この生き物は、ヨハネが自分の想像を駆使して表現したものです。エゼキエル書にも似たような表現がありますが、この動物は「大変強いもの」を表しています。つまり、神の力強さを象徴しているのです。神は、全き愛をもって私たちが愛すると同時に、力強いお方です。

■聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな

「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」」（黙示録 4:8）

強い生き物たちが昼も夜も絶え間なく叫び続けていたとは、神の前では誰もがひれ伏して賛美するということです。なぜなら、私たちは神によって造られたからです。造られたものはひざまずいて神を賛美します。つまり、神はすべての創造主であることを、ここは象徴しています。

また、「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな。」という表現は、三位一体の神を象徴しています。旧約聖書にも、「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。その栄光は全知に満つ。」（イザヤ書 61:3）という表現があります。

しかし、三位一体は、聖書を理解する上で最も困難な部分でもあります。父と子と聖霊が神であるなら、神は三人です。しかし、聖書は、神である主は一人しかおられないと教えています。これは私たちの理性では理解不能です。

ですから、ここで私たちが知らなければならないことは、神を知る道は理性ではないということです。理性で神を知ることはできません。神を知る道はただ一つ、信仰しかないのです。つまずきを乗り越える手段は信じるしかありません。つまり、神は信仰の対象であって理性の対象ではないということを、私たちは知らなくてはならな

いのです。納得するから信じるのではなく、納得できないから信じるのです。つまり、くから信仰なのです。

聖書は、私たちが自分の知恵で神を知り得ないのは神の知恵であると教えています。それは、誰も誇ることがないためです。神に近づくとは、聖書を学ぶことではありません。聖書に対して納得を求め、納得できたら信じようとする人が大勢いますが、それではいつまでたっても神に近づくことはできません。神を納得することはできないからです。特に、人は十字架のことばにつまずきます。なぜ 2000 年前の十字架が私たちの罪を赦すことにつながるのか、なぜキリストの復活が私たちにも適用されるのか、人であり神であるとはどういうことなのか……。これらの疑問に対して、理性が出す答えは「ばかばかしい」というものです。しかし、聖書はこう教えています。

「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」(I コリント 1:18)

神は信じる者を救う方であり、十字架のことばこそが救いを得る者にとっては力となると、イエス様は私たちに教えてくださいました。三位一体についてあなたが納得するかどうかはいつでもよいことであって、ただ信じるなら救いを受け取ることができるのです。それで、強い者であっても賢い者であっても、ひれ伏して神を賛美するのです。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。」という言葉には、このような意味があります。

■昔いまし、今いまし、後に来られる方

では、私たちは、具体的に何を信じるというのでしょうか。次に着目したいのは、「昔いまし、今いまし、後に来られる方」という言葉です。これは、神の永遠性を象徴しています。聖書が教える永遠というのは、昔も今もこれからも変わることがないことです。この世界で「永遠」というと、時間がいつまでも延びることを想像しがちですが、そうではないのです。

この世界に変わることがないものなどあるのでしょうか。人の体は1日に何億という細胞が死んで入れ替わっています。つまり、私たちは日々変化し続けています。川の水は刻一刻と流れ続け、一度たりとも同じ水が流れることはありません。つまり、同じ川など存在しないということになります。

つまり、この世界は変化し続け、止まることはありません。この世界に変わらないものなど何もないのです。すべてが変化しているこの世界を、有限性と言います。そして、有限性のこの世界は変化し続け、最後は滅びてしまいます。

これに対して神様は永遠性であり、変化しないお方です。変化しないとは、どういうことでしょうか。

1. 神の愛は変わらない

「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」

(へブル 13:8)

神がいつまでも同じであるということは、たとえどんな罪人になろうとも神の愛は変わらないということです。それで、私たちは大胆に神の御座に行くことができます。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

(へブル 4:16)

人間の愛は変わっていきます。しかし、神の愛はまったく変化しません。人間なら機嫌のいい時と悪い時があるでしょう。時と場合によって対応が変わることもあります。しかし、神はいつでも同じであり、いつでも私たちを受け入れ、いつでも私たちを愛し、いつでも同じ対応をしてくださるのです。

ですから、あなたがどんな状態になろうとも、どんな罪を犯そうとも、罪を指摘されてどれほど苦しくとも、神の愛を受けるために神のもとに行きなさいと、聖書は語ります。これが神の永遠性の第一の特徴です。

2. 神はあなたを必ず助ける

変化しないということは、神があなたを見捨てることはないということです。神は、必ずあなたをとりなし、完全に救うことができます。

この世界では、手がつけられないほどひどい病は治療を断念して放棄するかもしれません。しかし、神はどんな状況でも変わりませんから、常にとりなし、そして完全

に私たちが癒すことができるのです。神は、私たちの病気がどんなにひどくても放棄するということはありません。ここに希望があります。

「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」（ヘブル 7:24-25）

神はいつでもとりなしをして、完全に直してくださると約束されています。

3. 神に対する信頼を投げ捨ててはならない

神は絶対にあきらめることはなさいませんが、私たちの側であきらめて治療を放棄してしまうことがあります。そのため、神の確信を投げ捨ててはならないと聖書は教えています。

「あなたがたは、捕らえられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。」（ヘブル 10:34-35）

いつまでも残る財産とは、イエス・キリストのことです。私たちは、この世で何かを手にとると、自分の価値が上がったように錯覚して安心します。しかし、何を手にしても、結局は全部消えてなくなるのですから、実際には何も手にしていないのと同じです。たった一つ残る財産は、イエス・キリストだけです。たとえ全世界を手に入れても、永遠のいのちを損じたら何になるのかと聖書は語っています。

私たちにある選択は二つしかありません。イエス様を取るか、取らないかだけです。この世のものは何を手にしてもすべて失われていく幻と同じです。大事なことは、永遠のいのちであるイエス・キリストをしっかりと手にしているということです。

ですから、私たちは確信を投げ捨ててはいけません。見える状況がどんなに悪くてもそれも幻です。いつまでも残るものは神のことばだけであり、イエス・キリストとの関係だけです。そのため、私たちは惑わされてはいけません、確信を投げ捨ててはいけませんということです。

これが、神は永遠性であり、昨日も今日もいつまでも変わらないということの意味です。ですから、私たちが信頼すべきはイエス・キリストであり、そこにとどまることが大切なのです。

■どうやってイエス・キリストと出会うのか

私たちの世界は変化し続ける有限性の世界ですが、神は全く変化しない方です。ですから、この世界と神様に接点はありません。では、どのようにして神と出会うことができるのでしょうか。

有限性の世界では神を認識することはできません。変化し続けるものは、変化しないものをとらえることはできないのです。しかし、動くボールであっても、高速カメラでとらえれば、一瞬一瞬は止まっているかのように切り取ることができます。つまり、動く世界と不動の世界は、その瞬間瞬間ならば、接点があるということです。ここに神との出会いがあるのです。

つまり、私たちと神との出会いは瞬間です。ところが、変化し朽ちていく世界の流れの中で、瞬間はすぐに過去になります。つまり、この世界は過去しか持っていないのです。そして、未来はありません。

私たちの苦しみは100%過去の出来事です。過去が私たちを苦しめ、その苦しみによって未来に不安を抱いています。しかし、その未来もやがて過去になるのです。この過去から出たければ、未来に心に向けるしかないわけですが、それができるのは神だけです。過去を白紙にできるのは、神の赦しの恵みだけなのです。

十字架の赦しの恵みは、私たちの過去をすべて白紙にします。過去を消すことによって、私たちは未来に心を開くことができるようになります。そして、その体験ができるのは、「今」だけなのです。神は永遠であり変化しませんから、私たちが神と出会うことができるのは瞬間瞬間の出来事というわけです。

神と出会ったその瞬間に、罪が赦された自分を知り、喜びを味わいます。しかし、その瞬間が過ぎると、またこの世の生活に流されてしまいます。この地上ではそれを繰り返して生きていくしかないのです。この世界では感謝とつぶやきを繰り返すしかありません。しかし、これを繰り返すことを続けることで、私たちの信仰が成長します。それが信仰です。

理性で神を理解することができないのは、理性とはこの世界の因果関係を理解する知恵だからです。この世界の関係性を説き明かしていくのが理性です。しかし、神は

この世界の因果関係に支配されてはいません。ですから、瞬間瞬間に出会うことで神を知り、この信仰をもって神を知り、神との関係を築いていくのです。

「あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 10:36-11:1)

私たちがこの世界で神と出会うことができるのは瞬間です。それで私たちは、瞬間瞬間に神を信じると告白し、時間がたつとつぶやくことを繰り返してしまうのです。それでよいのです。信仰は、そうやって成長させていくものなのです。

では、私たちはいつ神と出会うことができるのでしょうか。神が私たちと出会うために用意しておられる接点は苦しみです。すべてが滅びに向かうように定まっているこの世界で、私たちは必ず苦しみに出会います。苦しみとは、罪あるいは死の恐怖と言われるものです。死の恐怖によって私たちは見える安心にしがみつきます。これが罪です。そして私たちの苦しみには、困難・試練というものがあります。この苦しみを、神は私たちと出会う接点としてくださいました。そして、イエス・キリストはこの地上に来られ、その接点を示してくださいました。罪に苦しむ者には赦しを、死の恐怖に苦しむ者には復活を、問題に苦しむ者には解決を与え、私たちを助けてくださいました。

つまり、イエス・キリストと出会える瞬間とは、苦しい時です。

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」(ヘブル 2:14-15)

神は私たちと接点を持つために人として来られました。そして、私たちの苦しみを象徴する死から解放してくださったのです。

「主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。」（へブル 2:16-18）

神がなぜ人として来られたのか、人の苦しみを神ご自身が背負い、それを接点とするためです。つまり、神と私たちの接点は苦しみなのです。

では、あなたは苦しい時に神と出会っているのでしょうか。つらくなったとき、神ではなく他のものに頼ってはいないでしょうか。せつかく神様が用意してくださった神と出会える瞬間を放棄してはいないでしょうか。人の慰めを求めたり、見えるところの安心を求めたりすることなく、「イエス様」と叫んでいるのでしょうか。

私たちは 24 時間神と出会っているわけではありません。苦しみの瞬間こそが神と出会うチャンスです。

「また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるとにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」」（黙示録 4:9-11）

「これらの生き物」とは被造物を表し、「24 人の長老」は教会を表します。被造物が神を賛美し、教会がこの世の誇りを投げ出し、神に感謝をささげる様子で黙示録 4 章は締め括られています。

「今の時のいろいろの苦しきは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」（ローマ 8:18-20）

服従させた方とは神ではなく、罪によって服従させられたという意味ですが、ここで重要なことは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなかったということです。それです。希望があるのです。そして、今の苦しきは、神が私たちに掲示されている希望に比べれば取るに足りないものだということです。

私たちは苦しみの瞬間瞬間に神に出会う時神は私たちに未来の約束を見せてくださいます。それが私たちの希望です。それが私たちの感謝です。